オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

オプション教材ユーカリ　読解マラソン集

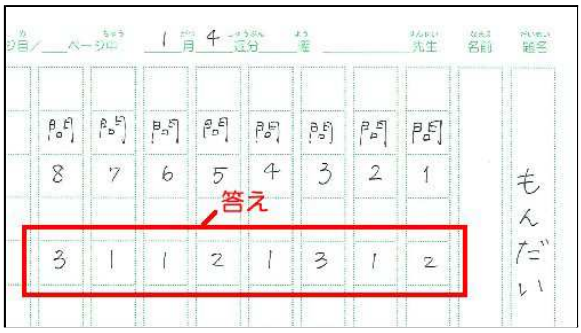
ユーカリ

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。
読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。
読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

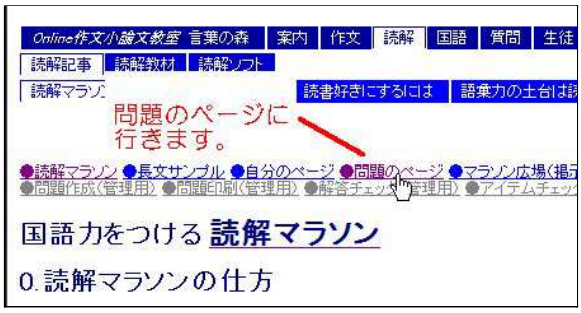
読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

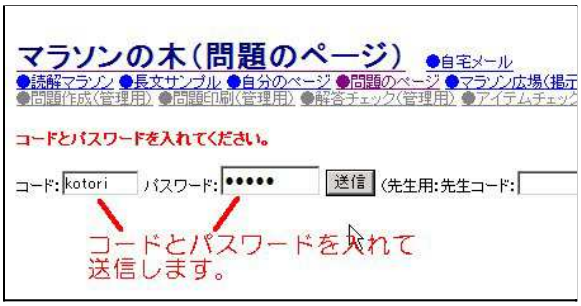


▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

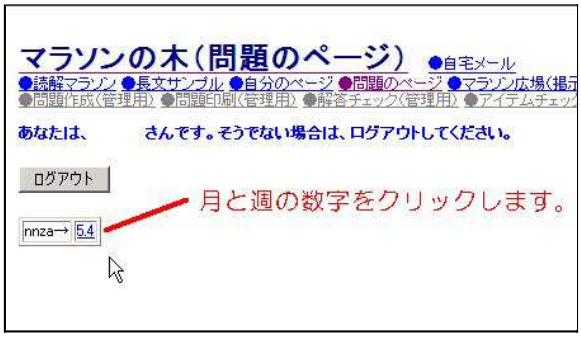
1.



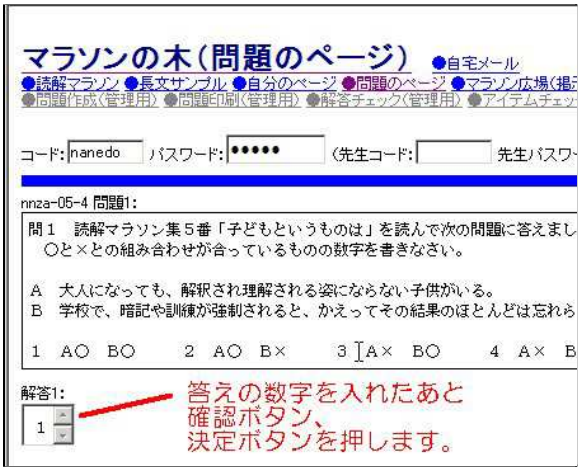
2.



3.



4.



5.

私はいろいろな植物の中で葱に強くひかれる。葱ぐらい身近で、優しくて、それでいてたくましいものを私は知らない。これは全く妥協がない。青と白と二つの色に徹して、いい加減な装飾などかえりみもしない。土中に入れば入るほど白に徹し、空に向かえば向かうほど青に徹する。どんなときでも独自の香に徹する。我が家の粗末な台所にあっても葱は葱だし、豪華な卓上の料理にあっても葱は葱以外のものではない。

これは何でもないようでいて実に鋭い。無数の葱の穂先が空に向くと、すばらしい鋼鉄のような威厳を持つ。それでいて触れると一つ一つ実に柔らかなのである。葱の集まったところはまさに庶民の怒りである。

（加藤秀俊「暮らしの思想」）

昔から本所にはおいてけ堀という堀があって、魚を釣りに行ったりすると、堀の底で太い声で、「おいてけ、おいてけ」と声がするので、釣りに来た人は魚も釣り道具もなんでもおいていかないといけないのだそうです。いったいその声の主はどんなバケモノなのだろう、山椒魚みたいにひらべったい姿をしているのか、がまがえるのかっこうをしているのか、いろいろとコワイ妄想がひろがって行きました。縁日の夜店も、世田谷の田舎では見られない賑やかさで、しんるいの徳平おじさんはステテコ一枚ではげしくウチワで蚊を追いやると、たいていボクに三十銭くらいくれました。当時の三十銭は大金で、ボクも何から先に買おうか迷ったのです。

（谷内六郎「心のふるさと」）

折り紙は、一枚の紙さえあれば、糊やはさみを使わなくても、ただ折ってゆくだけでいろんな形のものがつくりあげられる。つまり、素材を全然傷つけずに、素材をそのまま使って生かせるのである。これは、およそ世の中に無意味なもの、無価値なものは存在しないと考える日本人の考え方に通ずるものであろうか。生きとし生けるものすべてに――生物たると無生物たるとを問わず――それぞれに存在理由があると思うからこそ、たとえ一枚の紙であっても、はさみを入れることがはばかられる。この世の中にむだなものはありえないがゆえに、一見むだと思われるものにも、使用価値を見いだす。一枚の反古も、折り紙にすることで、新しい生命が与えられる。

考えてみれば、いま、われわれが目にし、手にする古い文化財でも、それが実際に作られ、使われたときには、まるで異なった印象を与えるものだったといった例が、ずいぶん多いのではないかと思う。例えば、あおによしの奈良の都だ。青いかわらに赤い柱。いま見れば、俗悪至極のものだったかも知れないし、金閣寺などは金ぴかで、我慢のできない建物だったかも知れない。歳月の経過が、おのずから違った美をつけ加えることもあるに違いないが、昔にもどって、最初の姿を見ることができれば、よりよい理解の助けとなるであろう。

「この石が動かせるかい。」

次郎はまごつきながらも、とっさにそんな照れかくしを言うことができた。そして、言ってしまうと、不思議に彼のいつものおうちゃくさがよみがえってきた。

「何だい、こんな石ぐらい。」

仲間の一人がそう言って、すぐに石に手をかけた。石は、しかし、容易に動かなかった。するとみんながいっしょになって、えいえいと声をかけながら、それをゆすぶり始めた。間もなく、石の周囲にわずかばかりのすき間ができて、もつれた絹糸を水にひたしてたたきつけたような草の根が、まっ白に光って見えだした。

（下村湖人「次郎物語」）

モウシ（「もしもし」と同じ呼びかけの言葉）が公然と、誰に聴かれてもよい言葉の前触れであるのに対して、あまり聴かせたくないナイショ話のことを「こそこそ話」というのはどういうわけであろうか。それはわかりきっている。こそこそと話をするからだ、という人があるかもしれませんが、その低い話し声を、どうしてまたコソコソと形容しはじめたかが、実はやっぱり不審なのであります。有名な芭蕉翁の俳諧の中に、（こそこそと草鞋を作る月夜ざし）という句もありますが、これはわらなどの軽くすれる音から出たもので、ちょうど落ち葉の中を歩く音を、がさがさと形容するのも似ております。人が耳のそばで何かいう時には、そんな声は出さないと思います。多分はいま一つ、別に此方には理由があったのを、後にだんだんと融合してしまって、コッソリというような副詞も生まれ、またはコソコソ泥棒、略してコソドロなどという新語もできたものでしょう。こんなつまらぬたった一つの言葉でも、気をつけて見ると、やはり面白い歴史が付いています。古い文学では私語はササメゴト、またはササヤキといっております。地方にはそれがまだ残っていて、たとえば九州の北部は今でも一般にソソメキバナシといい、ソソメクというのがその動詞であります。中部地方でも福井市の付近ではソソヤク、丹波でももとはソソカウといっておりました。私の想像では、サ行すなわちＳの子音が、どんなに低くても耳につきやすいところから、人がこういう言葉を作り出したので、ソシルという動詞なども、やはり最初はＳ音を気にする者が言いはじめたものと思います。コソコソ話の方も同じ系統と言うことはできますが、これにはなお一つ、新しい心持ちが加わっているようです。すなわち単なるサとかソとかの音が耳立つという以上に、特にコソという「てにをは」が盛んに使われる物言いという意味で、どうも私にはご婦人の責任のように感じられます。これまでの国文法の先生たちは、コソもゾも同じ価値、ただ偶然の使いわけのように教えていますけれども、この二つのものはだいぶ感じがちがい、また口にする人の種類もちがいます。中古に女流文学が流行してから、コソの用法が急に発達した如く、今でも気をつけていると、男の人はあまり使わず、また使うとややめめしくもきこえます。これに反して女性は小さなことにも力を入れて、それこそ、私こそ等を連発しようとします。しかも遠慮がちに小さな声で、人の顔を遠目に見ながら、何かというとこの「こそ」を使うのですから、つまりコソコソ話の専門家ということになるので、少なくともこの一つの戯語を考案したのは、それを皮肉った男たちの所行にちがいありません。地方の類例を比べてみますと、滋賀県の東部では私語をモノクソといい、徳島県の北部ではモノコソイウというのがささやくことであります。モノすなわち言語ですから、その下に付けたコソは「ひそかに」の意味でなく、むしろそのコソをよく聴く時の感じに近づけんがために、わざとコソコソと二つ重ねたのかもしれません。こういたずらは男はなかなか上手です。たとえば山形県の一部では、女が告げ口をするのを「梨売る」という隠語があります。あの地方の若い女たちは、何か力を入れてものを言うときに、句の終わりにナシという語を添えます。それを知っている人なら、この複合動詞はよくわかりかつ面白いのです。コソコソの意味もそれと同様に、いやコソばかりを耳立たせる話ということで、それも今日となっては過去の遺物であります。

（柳田国男「毎日の言葉」）

「母語」ということばに私がとりわけこだわるのは、じつは、日本語にはいつの頃からか「母国語」ということばが作られて、それが専門の言語学者によってさえ不用意にくり返し用い続けられているからである。

母国語とは、母国のことば、すなわち国語に母のイメージを乗せた煽情的でいかがわしい造語である。母語は、いかなる政治的環境からも切りはなし、ただひたすらに、ことばの伝え手である母と受け手である子供との関係でとらえたところに、この語の存在意義がある。母語にとって、それがある国家に属しているか否かは関係がないのに母国語すなわち母国のことばは、政治以前の関係である母にではなく、国家にむすびついている。そのためにこれを区別せずにいつでも「母国語」を用いていると、次のような奇妙なことが生ずる。

あるとき新聞が「単一民族国家」と思い込まれている我が国において、その例外をなすアイヌ人やオロッコ人が存在することをあらためて思い起こさせてくれる、次のような記事をのせた。

「（沖縄でおこなわれた教研全国集会でのこと）『平和と民族』分科会では、民族衣装に身を固めた北海道の少数民族ウイルタ（オロッコ）の北川源太郎ことダーヒンニェニ・ゲンダーヌさんの母国語による訴えが静かな波紋をひろげた。それは長年、民族差別の中で苦難の生活を過ごしてきたウイルタの人たちが自らの手で、民族の誇りと文化を守ろうとする自立の宣言であり、それは同時に日本を単一民族国家としてきた日本人の意識の変革を迫るものでもあった。」

私はここに報じられたゲンダーヌさんの行動はもちろんのこと、また、それを支持して、ひろく世に知らせるために記事にした、この文章の書き手にも共感する。そもそもこういう記事は、言語的少数者が置かれている状況にたいする深い理解なくしては書けないものである。それだけに、「ゲンダーヌさんの母国語」にはめまいを感じるほどの当惑をおぼえたのである。

ゲンダーヌさんは北川源太郎という日本名の持ち主であるから、たぶん日本国籍の人であろう。だとすれば、ゲンダーヌさんの母国は日本で、その母国の言葉は日本語であるから、オロッコ語のことを母国語と言ってしまってはまずいのである。ゲンダーヌさんのことばは、この「母国語」とするどく対立するところの非母国語、非国語であるからこそ、ここにその訴えを報じる意義があったのではなかったか。

ゲンダーヌさんが用いたことばは、国家とは対極にあって、その国家によって滅ぼされ、滅ぼされつづけてきた、かれ自身のうまれながらの固有のことばなのである。それを母国語と呼ぶ矛盾が、これほどゲンダーヌさんに共感を寄せる記者に気づかれず、さらに数百万の読者からもとりたてて疑問があらわれなかったことに、ことばとその話し手との関係に関する、日本人の平均的な理解度があらわれてはいないだろうか。すなわち、ことばはすべて国語であると考える日本人の考えかたに根深く宿っているこの盲点こそは、この記事がまさに指摘してきた、「日本人を単一民族国家としてきた日本人の意識」をありのままに示しているのである。

ゲンダーヌさんは日本人の国家、すなわち母国がその使用を保障してくれないことばを生まれながらのことばとして持っている。学校、役所、裁判所のどこにも、そのことばのための場所はあてがわれていない。だから、そのことばはどんなことがあっても母語とはいえないのである。もしかして太古にあったかもしれない、まぼろしの母語を思い描く以外には。

（田中克彦「ことばと国家」）

都会にはむろんのこと、日本の町々には、ある大切な要素が欠けている。

―沈黙である。静寂である。

（中略）

わが屋戸のいささ群竹吹く風の
音のかそけきこの夕べかも

夕風にそよいで、かすかな葉ずれの音をたてている群竹。作者の大伴家持は、その静寂にじっと耳を傾けている。このような、かそけき音にひかれる心の姿というものこそ日本人特有の姿だった。古池に飛び込む蛙の音、ほかの国の人たちが聞いても、おそらくなんの感興もおこさないであろうような、そのような音を、日本人が何世代にもわたって味わい続けてきたのは、それが「音」だったからではない。「静けさ」だったからなのだ。全山に降る蝉しぐれ、岩にしみ入るようなその蝉の声に芭蕉は耳をとられ、そして、その一句に「閑かさや」という適切な初語を置いた。

静かさというものは、音のない状態をいうのではない。音が音として、くっきり浮かび上がる、そのような空間と時間をさすのである。音は「静寂」というカンバスに描かれて、初めて「音」になるのであり、同様に静かさというものは、そこに音がくっきりと浮かび上がることによって「静寂」となる。

湯のたぎる音が茶室の静寂をささえ、懸樋の水音が庭の閑寂をいっそう深いものにする。かぼそい虫の声が秋の夜の静けさを呼び、炭火のはじける音が冬の午後の沈黙を生む。こうした「音」と「静寂」のこよなき調和の場こそ、日本人の愛した生活の空間であり、暮らしの時間だった。

だが、「文明」が進み、「文化」が発展するのと歩調を合わせて、静寂は私たちから、反対に遠ざかってしまった。日本の都会の、日本の町々のどこに、「群竹のかそけき音」を耳にしうる場所があろうか。ほんのわずかでも、ほんのいっときでも、静かに思いにふけることのできる空間や時間が、都会の、町々のどこに残されているというのか。

全く逆なのである。私たちの文明とは、静寂を騒音に変えることだったのであり、私たちの文化とは、「かそけき音」を拡声器でただやたらに増幅することだったのだ。

日本の町々には、便利さのための、ありとあらゆる施設が造られている。そして、これからも造られようとしている。たった一つ、「静寂の空間」を除いて。

現代の日本の文明は、静寂だけはつくりだすことができないのである。いや、つくりだせないのではなく、つくりだそうと思わないのだ。静寂な空間とは、空白な空間であり、むだな空間だと思っているからである。自然は真空をきらうというが、現代の日本人は沈黙をきらう。きらうのではなくて、恐れているのだ。だから、少しでも、静寂の場所があれば、あわててそこを騒音でふさごうとする。

武器は拡声器である。駅でも、交差点でも、公園でも、横丁でも、喫茶店でも、ホテルのロビーでも、大学の構内でも、寺院でさえ、今や騒音なしには存在しえない。岩にまでしみ込むほどの「閑かさ」の力を、日本の社会は、とうとう文明によって追放してしまった。そして、人々を沈黙の恐怖から救い出し、静寂の不安から連れ出した。

さあ、もう安心するがいい。どこにいても、騒音が付き添っている。どうだ、寂しくないだろう……。

こうして、人々は、騒音に取り巻かれ、その中で安心して憩い、眠る。

しかし、これほど夢中になって音を製造したにもかかわらず、私たちは、実は何一つ「音」を聞いていないのである。聞こうにも、聞くことができないのだ。私たちのまわりに、いったい、生活のどんな音があるというのか。

折にふれ、人々は、夜明けとともに聞こえてきた納豆売りの声、タベとともに響いた豆腐屋のラッパの音を懐かしむ。だがそれは、実をいうと、物売りの声やラッパの音そのものを懐かしんでいるのはなく、そうした生活の音をしみじみと聞くことができた「静かさ」への郷愁なのである。現に、それに代わる生活の音なら、今

だってまわりにたくさんあるではないか。けれど、私たちには、もうそれが聞こえない。なぜなら、音の一つ一つが、くっきりと浮かび上がってくるような静かな空間、沈黙の時間を捨ててしまったからだ。そして、すべての音を、「文化」の名のもとに、単なる騒音につくり変えてしまったからである。

島根県の山あい、津和野の町で、私は久しぶりに忘れていた「音」を聞いた。それは、町のいたるところを流れる用水のささやきだった。

この町には、九千人という人口の十倍もの鯉が放されているのだ。

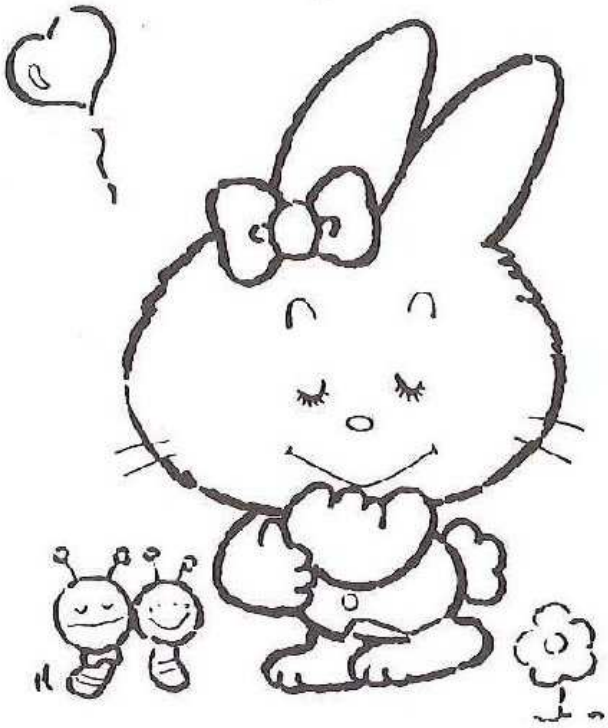
夜、八時、私は宿を出た。祇園町を通り、新町通りを抜け、殿町を過ぎ、大橋を渡った。どこを歩いても、足もとに用水の鳴る音がついてきた。それはまさしく津和野の町の音だった。

三百年来、この町の人たちは鯉を飼ってきた。「食べない、捕らない、殺さない。」といって。だが、人々はただ鯉をだいじにしたのではない。鯉をだいじにすることによって、この用水の音を大切にしてきたのだ。水の「声」に耳を傾けることのできる静かさを。

大橋に立って、私は改めて思う。

日本の暮らしのなかで、どんな「かそけき」音でも聞くことができ、それに耳を傾けることができる。そのような空間をつくること、そのような時間をもつこと、これこそが本当の文化、本当の生活なのではなかろうか、と。

（森本哲朗「日本のたたずまい」）



また、虫のことだが、蚤の曲芸という見世物、あの大夫の仕込み方を、昔何かでよんだことがある。蚤をつかまえて、小さな丸い硝子玉に入れる。彼は得意の足で跳ね回る。だが、周囲は鉄壁だ。さんざん跳ねた末、若しかしたら跳ねるということは間違っていたのじゃないかと思いつく。試しにまた一つ跳ねてみる。やっぱり無駄だ、彼は諦めておとなしくなる。すると、仕込み手である人間が、外から彼を脅かす。本能的に彼は跳ねる。駄目だ、逃げられない。人間がまた脅かす、跳ねる、無駄だという蚤の自覚。この繰り返しで、蚤は、どんなことがあっても跳躍をせぬようになるという。そこで初めて芸を習い、舞台に立たされる。

このことを、わたしは随分無慚な話と思ったので覚えている。持って生まれたものを手軽に変えてしまう。蚤にしてみれば、意識以前の、したがって疑問以前の行動を、一朝にして、われ誤てり、と痛感しなくてはならぬ、これほど無慚な理不尽さは少なかろう、と思った。

「実際ひどい話だ。どうしても駄目か、判った、という時の蚤の絶望感というものは――想像がつくというかつかぬというか、一寸同情に値する。しかし、頭かくして尻かくさずという、元来どうも彼は馬鹿者らしいから……それにしても、もう一度跳ねてみたらどうかね、たった一度でいい」

東京から見舞いがてら遊びに来た若い友人にそんなことを私は言った。彼は笑いながら、

「蚤にとっちゃあ、もうこれでギリギリ絶対というところなんでしょう。最後のもう一度を、彼としたらやってしまったんでしょう」

「そうかなア。残念だね」わたしは残念という顔をした。友人は笑って、こんなことを言い出した。

「丁度それと反対の話が、せんだっての何かに出ていましたよ。何とか蜂、何とか言う蜂なんですが、そいつの翅は、体重に比較して、飛ぶ力を持っていないんだそうです。まア、翅の面積とか、空気を搏つ振動数とか、いろんなデータを調べた挙げ句、力学的に彼の飛行は不可能なんだそうです。それが、実際には平気で飛んでいる。つまり、彼は、自分が飛べないことを知らないから飛べる、と、こういうんです」

「なるほど、そういうことはありそうだ。――いや、そいつはいい」

私は、この場合力学なるものの自己過信ということをちらと頭に浮かべもしたが、何よりも不可能を識らぬから可能というそのことだけで十分面白く、蚤の話による物憂さから幾分立ち直ることができたのだった。

（尾崎一雄『虫のいろいろ』）

大学生の「私」は長兄の次男涼（五歳）の死の知らせを受けて長兄の家へやってきた。涼は長男の卓也（小学校三年生）と家の近くの川原に行き、小舟に乗って蛍を見ていたが、蛍を見るのに飽きて卓也が舟をゆらせて遊んでいるうちに川に落ちて亡くなったとのことであった。卓也が心配だから一緒に寝てほしいと「私」は長兄に頼まれた。

「叔父さん、お父さんはぼくのことをなにか言っていましたか」

卓也の目が、私の顔にすえられた。

「いや、なにも話はしていない」

私はズボンを脱ぎながら答えた。

「お父さん、何か変なんですよ。ぼくが八時ごろお線香をあげに行ったら、あっちへ行けというように手を振るんです。お客さんが帰ってからにしろという意味なんだろうと思ったけど、きつい目をしていたんです」

卓也の顔に、おびえの色がうかんだ。

「忙しいからさ、そんなことを気にするんじゃないよ。さ、寝よう」

私は卓也の肩を抱くとベッドに歩み寄った。そして、下段のベッドのタオルケットをまくり腰を下ろした。

卓也は、黙ったままはしごをふむと上のベッドにあがった。

私は、部屋の中を見まわして立ち上がると、窓を閉め部屋の灯を消した。そして、頭をすくめながらベッドに身を横たえた。背丈が伸びてからも使えるように作ったらしく、ベッドは決して窮屈ではないが、ふとんに子供の甘いにおいがしみこんでいて、涼のベッドに寝ていることが落ち着かなかった。

家の中は森閑としていて、人声もきこえない。長兄夫婦が、涼の遺体のそばで黙然と座りつづけている光景が思い描かれた。

「蛍がたくさんいたんです」

卓也のつぶやくような声がした。

私は、卓也が前夜のことを思い出していることに肌寒さを感じ、やはり涼の死がかれの頭を占めていることを知った。

「そうか、それは珍しいね」

私は、卓也を哀れに思いながら低い声で答えた。

「どこで生まれるのかな。蛍には川を飛び越える力がないんですね、両方の川岸あたりだけを飛んでいるんです」

卓也は仰向いて身を横たえているらしく、声が上方の闇にとけこんでいる。その声には、愁いに似たひびきがふくまれていた。

私は、黙っていた。卓也の頭には、川で起こった事故の記憶がうず巻くようにあふれているのだろう。返事をすれば、卓也の意識は一層記憶の中にのめりこんで感情をたかぶらせ収拾のつかないものになるおそれがある。

「水ってこわいですね」

「そうかね」

私は、しかたなく答えた。

「涼が落ちたら水しかないんです。のみこんでしまうんですね」

卓也は訴えるように言った。

弱ったな、と私は思った。卓也は、仰向いて寝ながら、闇の中に光を放って飛び交う蛍と黒黒とした川の水を思い出している。それは無理もないことなのだろうが、その記憶から一時的にも解放させてやりたかった。そのためには、私が沈黙を守るのが良策だし、卓也に眠りが訪れてくることが望まれた。

卓也の声はそれきり絶えたが、かれがベッドで身じろぎもせず目を光らせているのが感じとれた。

しばらくして、私は上のベッドで卓也の起き上がる気配に気づき、振り返った。

「暑いんですけど、窓を開けていいですか」

低い声が、もれた。

私は、眠っているふりを装って返事をしなかった。

卓也は、手をのばし静かに窓を開けた。そして再びはしごをふむとベッドに身を横たえたようだった。

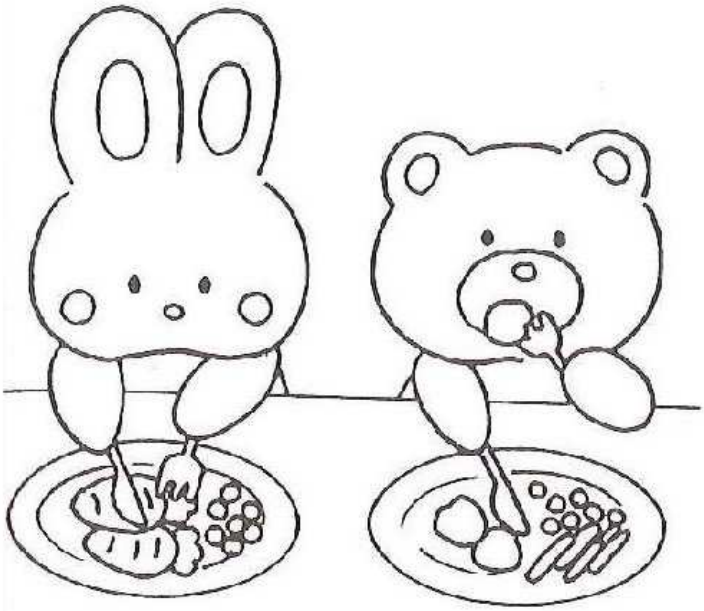
静寂が、ひろがった。冷えた夜気とかえるの声が部屋の中に流れこんできている。私の目はさえていた。卓也が目をひらいている間は眠ってはならぬ、と自分に言いきかせていた。

卓也の寝返りを打つベッドのきしみ音につづいて、かすかにあくびをする気配がきこえた。体に安らぎがわいた。かえるの声が、波の音のように高低を繰り返している。

眠気が四肢を麻ひさせはじめた。私は、上方でかすかな寝息が起こるのをたしかめてから目を閉じた。

（吉村昭『蛍』）

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



一般に若い人々は青春というものを一つの特権と考えている。何をしても、何を望んでも、自分たちには許される、いや許されなければならない、という自信を持っている。これはまだためしてもみない自己の可能性を無限大に見つもって、それを頼む心理であるとともに、子が親に甘え、その庇護を当然のこととして期待するように、人生に甘えている態度、人生を甘く見ている態度でもある。若い人々が高い理想を持ち、大きな希望をいだくことはもとより妨げない。何ごとをもなしうるという自信を持つことも許されよう。しかしかれらがいったんその理想の追求を始めたとき、かれらがかちえたものはことごとく自己の実力によるものであり、かれらがなし得なかったことはことごとく人生の不合理に基づくものであると速断してよろしいであろうか。いうまでもなく世の中には青年の力を借らずしてはなし得ないことがたくさんある。社会の改造のごときはその尤なるものであろう。しかし自分の追求するものが自己の実力の外にあるとき、それより生じる失敗や悲劇の責任を自己以外のものに転嫁することは許されない。青年の犯す過失は、それが青年であるということによって許される場合がしばしばある。しかしそれはあくまで許されるのであって、その責任の解除をこちらから要求する権利はまったくないのである。

わたしは青年も自らの過失によってしたたかに傷つくことを、また傷つくことを恐れないことを希望したいのである。もしかれらの追求する目的が大きく高い場合には、かれらの流す血は実に美しく、そのような過失は断じて悔恨を伴うことはないはずである。それは若気のあやまちなどではもちろんなく、青春時代の誇りということができよう。

しかしながらもしかれらが、たとえ自ら意識しないにしても、他人を傷つけるばかりであって、自らはなんの犠牲も払わないとしたら、その記憶は終生かれらを苦しめ、それを思い出すたびに穴があれば入りたい悔恨を起こさしめるに相違ない。だが青春の時代には常に自己を中心にしてものごとを考えやすいために、自己の言動がいかに他人を傷つけているかについてはきわめて鈍感なのである。それとともに自己の能力の限界を知らないことからくる傲慢さのために、他人から与えられた好意や親切にほとんど不感症である場合が多い。子を持ってはじめて親の恩を知るように、人の情けを身にしみて感じるのは壮年期を過ぎてからである。青年期が忘恩の年齢であるといわれるのは理由のないことではない。若い人々がかれらに与えられる好意を自己の才能に対する評価と考えやすいことはいちおうむりからぬこととしても、率直に感謝の気持ちを表現し得ないことを青年の弱点と考える反省が望ましい。

青年が自己の能力の可能性を無限大に見つもる傲慢さは、正直に自己の分を守って着実に生きてゆく人々に対する軽侮の念を生みやすい。これは最も戒むべき点である。人間のほんとうの偉さというものは、人生のさまざまの経験を積んではじめて理解されるのであって、その人の力量はいかにはなばなしい生き方をしたかというよりも、いかに正しく誠実に生きたかによって定まるのである。真に尊敬すべき人を青春時代に発見することのできなかった人は、生涯の不幸というべきであろう。

（河盛好蔵「青春について」）

カラーテレビは教育上よくない、白黒テレビのほうがよいという意見があることを聞いた。白黒テレビだと子どもたちは自分である程度まで着色したイメージをえがきうるし、それはさまざまでありうる。ところがカラーテレビだと子どもの想像力がはたらく余地がない。想像力は創造性の基本だから、つまり創造性の伸長をさまたげる結果になるのだという。

白黒テレビが、見本なしのぬり絵のように、色についての子どもの想像力をかきたてるという効果はあるかもしれない。だがその場合、色にかんする想像力を裏づける、いわばそれに対応する、経験の蓄積がなければならない。そうでないなら、白黒の画面を着色の画面に転化したイメージをもつことは困難だし、かりにそうしたことがなされたとしても、そこに成り立ったイメージは、きわめて単純でまずしいものでしかないだろう。子ども向けの怪人・怪獣テレビを見ているとき、これはおとなでも同様だと思わざるをえないことがある。

ところで、われわれ人間に色彩の豊富さを教えるまず第一のものは、自然である。山も海も川も、一つ一つの植物も動物も、なんと複雑で微妙な色彩に富み、陰影によるその変化を示すものであることか。私はガラパゴスの海で、空をあおいで熱帯鳥が羽ばたきもせずに翔けっていくのを見たとき、その白と空の青とがともに単色であるように見えながら、繊細な色彩の交響を心につたえてくるのにうたれた。

絵画は、どれほど自然に忠実であろうとしても、自然の色彩のことごとくをそのまま再現することはできない。そもそも、絵画はそのようなことを目標とはしないであろう。たとえば写実的な風景画であっても、それは自然からの抽象をもとにした創造あるいは再創造であるにちがいない。そして人間は、極度の抽象や単純化のなかに新たな美を発見する能力をそなえている。現代絵画にあらわれているくすんだ単色あるいはそれに近い色彩での画面の構成は、色盲的な夜行動物の世界だといえなくはない。人間にとって、それもまた一つの美である。

色彩ばかりではない。ものの形にかんしても同様である。抽象画における、ちょっと見れば単純な一本の曲線とか、交錯する数本の直線とかにも、その背後には画家に感受された豊富な外界があるはずである。外界の音響、たとえば風のいぶきや鳥のさえずりと、音楽の創造とのあいだにも、同一の関係が指摘されるであろう。ある点では、音楽における抽象と構成ないし再構成とは、絵画の場合よりいっそう高度かもしれない。

さて、現代において人間の生活環境から、自然は急速に追放されつつある。それにとってかわっているのは、人工の世界である。開発され都市化のいちじるしく進んだこの国土の風景を一見すれば、それは瞭然としている。巨大なビル、新家屋、舗道、高速道路、そのほか目に映るすべてのものは、色彩も形状も、自然と対比すれば単純化され抽象化されている。だからといって美しくないというのではないが、その人工の美しさを裏づける自然の本来の多彩さが失われてしまっていくのでは、やがては人工の美のまずしさを招来することになるであろう。

人間がどんな環境でも生きられるという、その高度の順応性は、こうした問題をむずかしくしている。密林のなかで何十年もくらすことが不可能ではないし、団地のせまいアパートにひしめきあって生活することもできる。長い年月を牢獄にとじこめられても、それだけですぐ死ぬというわけではない。そして、芸術などにはまったく背を向けて一生を送ったところでどうこういうことは起こらないし、実際に多くの人がそうしている。

もしも人間が、よりよく生き、よりよい社会をつくるという目標をもたないならば、この世界からの自然の消滅を憂える理由は何もない。問題の根本は、人間の生きかたについて理想や目標をもつかどうかにある。視野を大きく、また時間のはばを広くとってみるならば、自然の喪失は人間とその社会にいちじるしい影響をおよぼすことになるにちがいない。われわれの周囲に自然をどう保存するか、どのように新たな自然を設計するかは、いうまでもなく、現代社会の重大な課題である。ことに成長期の子どものために豊かな自然を生活の場として与えることは、なによりたいせつなことである。

（八杉龍一「自然と言葉」）

明治時代、英語の語学のことを英学と言った。漢学になぞらえたことばであろうが、漢学がすでに久しく実学の性格を失っていたことを考えると、実学の英語の語学が名前だけ英学と呼ばれようと、漢学と同じような性格のものたり得なかったのは当然であろう。それはともかく、明治時代に早くも精神的要素の加味された近代語の修得が考えられたことは注目に値する。

自国と外国の国力や文化の関係は三つの場合が考えられる。（一）自国が外国を凌駕している。（二）自国と外国が対等である。（三）外国の方が優越している。実学としての語学が生まれるのは、このうち（三）の場合である。（一）のようなときには外国語が一国の教育的関心事となることはまずあり得ないと言ってよい。

実学としての語学は、文化的にいわゆる後進国的社会において始まる。外国語は先進国と後進国を結ぶパイプであるが、両者の落差が大きければ大きいほど、このパイプの存在価値も大きい。少しくらい穴があいていても苦情などはきかれないであろう。ところが、受け取り側の文化が発達して来て、先進国との差をつめるようになると、語学というパイプはかつての万能性を失い、無条件の尊重を得にくくなる。水の漏れるようなパイプではこまるという意見が出て来る。落差が少なくなればなるほど、パイプは完全なものが要求されるであろう。すなわち、社会的水準が上がれば上がるほど、語学に対してもきびしい実用性を求めるようになる。もし、それが容れられないと、役に立たない語学だという批判が生まれる。現在のわが国の語学は明治時代のそれと比べると非常な進歩をとげている。それにもかかわらず、現在の語学は実用性について明治の語学が受けたことのないような批判の前に立たされている。これは、わが国が欧米諸国との間の落差を縮めて来た証拠である。

欧米の文物の移入を目的として始まった語学であってみれば、欧米との落差が小さくなって来れば、当然、その実用的性格を変化させなくてはならないはずである。

もう十数年前のことになるが、実業家の団体から学校の語学教育に対して、もっと役に立つ語学を教えてほしいという注文が出された。日本人の語学は読むばかりで、書いたり会話ができない。これを改善して、会話でも何でもできるようにしてほしいというのであった。これが役に立つ英語といわれるようになったきっかけである。この要望の中には、自覚されているかどうかは別として、外国と文化的に新しい関係に入ったわが国として、従来の語学の考えを修整しようという意図が汲みとられる。落差の少なくなった二つのタンクでは穴などのあいていないパイプでなくては、一方から他方へ水を流すことができない。読むだけではだめで、話したり、書いたりもできなくてはいけないという声が出て来るわけである。

この役に立つ語学を、という意見は大きな反響をよび、世論の支持を受けた。語学の関係者もこれに同調して、教授法の大幅な改変を試みたりもした。その成果にはかなり見るべきものがある。語学教育も一応の近代化をとげたと言ってよかろう。

しかし、これが依然として、実学としての語学だけを肯定していることは従来と変わりがない。役に立つ語学という意見自体も、その実学の基盤に問題が出て来たために生まれたものだから、実学的性格を強化するだけでは問題の真の解決にはならない。むしろ、実学に代わる新しい文化の学問としての語学が考えられるかどうかが問題にされるべきであったのである。ところがそういう意見はついにきかれなかった。実学の語学からの転換をせまられる事情が生じつつあるのに、かえってよりいっそうつよく実学に固執してしまった。語学の専門家たちが実業界の意向に全面的に賛成してしまったのも不思議である。

わが国が欧米諸国と肩を並べ、さらにそれを凌駕する日が来れば、実用だけの語学は消滅してもよいことになる。教育の一環としての語学は、そういう時代になってもすこしも価値を減じないものでなくてはならない。実用性が疑問視され出しているいまこそ、語学は文化の学問として新しく生まれかわる好機である。

わが国のように、独自の文化の伝統をもちながら、国民の大部分が外国語を学習しているというのは、異例に属することであろう。したがって、実用性だけでは語学に注がれる努力の正当化の理由として、薄弱である。その上に役立つ語学はどうしても、思考性を犠牲にしがちである。そういう懐疑ももたれはじめている。

（外山滋比古「言語と思考」）

私の郷里には、浄蓮の滝という多少名を知られた滝があるが、この滝に遊びに行った時も、帰る時は一番あとになるまいという気持ちが働いた。滝壺の近くで落下する水の飛沫を浴びていても何の怖さも感じなかったが、いざ帰途に就こうとして、いったん滝を背にすると、辺りのたたずまいは一変するかに思われた。（中略）

山火事は多かった。村の半鐘が鳴ると、大抵山火事だった。半鐘は火事の現場に向かう人たちをあつめるためのもので、いくら半鐘が鳴っても火が見えるわけでも、危険が身近に迫るといった不安があるわけでもなかった。子供たちは生き生きとした。どこか遠いところで容易ならぬことが起こっており、そこへ消防服を纏った大人たちが繰り出して行く。村はいつもの村とは異なった表情をとって来る。

山火事は、大抵、二月か三月の植え付けの頃が多かった。植え付けの伐採地を掃除に行った者が、枯れ枝などを集めて燃している時、その火が他に燃え移ってしまうのである。火が他に燃え移ることを「火が逃げる」と言った。「火が逃げる」という言い方には、ある感じがあった。私たちには、火が、どこへでも自分の望むところに自由に燃え移って行く生きもののように思われた。私たちは自分の家や囲炉裏や竈で毎日見ている火とは全く異なった火を頭に描いていた。山火事の火だけが、逃げたり、走ったり、追いかけたりする生きものの火であった。

その生きものの火を見るためには、山火事の現場まで出向いて行かなければならなかったが、残念なことに、子供たちの行けるところではなかった。一里も二里も離れている天城山中の出来事であった。

（中略）

小学校の一、二年の時のことであったと思うが、一度山火事を見に行こうとしたことがあった。馬飛ばしを見に行く時、富士の見える峠を一つ越さなければならなかったが、その富士の見える峠付近で、山火事が起こったのである。

私たちは村の大人たちの間にはいって長野を目指した。道は上りになっているので、ところどころで休まなければならないが、休むのはそのためばかりではなかった。道ばたに腰を降ろしていると、村の大人たちが駈けて行く。消防の若者も居れば、老人も、内儀さんも居る。居ないのは、子供たちばかりである。

――おい、お前ら、どこへ行く？

声が飛んで来ても、私たちは黙っている。今の言い方をすれば、黙秘権を行使しているのである。何と言われても、黙っている。

――火事場などへ行こうと思ったら、とんでもねえことだぞ。帰んな、帰んな。

しかし、大人たちが行ってしまうと、私たちは腰を上げる。そして駈けたり、歩いたりする。

長野の集落にはいったが、山火事は見えなかった。大人たちがみんな茅場の方へ出掛けて行ったためか、集落の内部はいやにひっそりとしていた。

私たちは集落を突っ切って、茅場へ向かう間道へ出たが、その頃から、何となくみんな家に帰りたい気持ちに揺られ始め、山火事見物の方はさしてどうでもいいような気持ちになっていた。薄暮は辺りに垂れこめ始めている。

芥川龍之介に「トロッコ」という作品がある。人夫たちにトロッコに乗せて貰って遠くまで行ってしまい、気が付くと、夕暮れが迫っている。帰りはトロッコに乗るわけには行かないので、夕闇の中を一人で帰って来なければならない。そういった少年のことが書かれている。

この「トロッコ」を読んだ時、私は山火事を見に行って、山火事は見ないで、途中から帰って来た幼い日のことを思い出した。

（井上靖「幼き日のこと」）

読解マラソン集　１１番　もう暦の上では　yu3

もう暦の上では春だというのに、京都では寒気がたちかえり、赤い花のついている椿の下枝が触れている庭石の上に、見ている間に大粒のあられがたばしり、勢いよくはねおどりはじめた。

あられはころころと岩をはしり、しなびた苔の間にビーズを散らしたようにちらばっていく。

やがてあられは淡々とした雪になって、うっすらと庭を染めはじめた。そのさまを見つめているうち、こんな日は奈良も人が出ないのではないかと思うと、無性に出かけたくなってきた。

（中略）

唐招提寺をふたりで訪れたのは、もう去年の春で、修学旅行の学生たちが静かな庭にひしめいていたが、私たちがゆっくりまわっている間に、潮がひくように彼等の姿はなくなり、ひっそりと静かになった。

入門は五時までだとその時知って、今度来るなら、朝早くか、五時直前に入れば、人に逢わず静かでいいだろうと考えたのを思い出す。

帰りに時間があればよることにして、いつ見ても静かな唐招提寺の森を右にして、まっすぐタクシーを走らせ、斑鳩の里へ向かう。

西の京と呼ばれているこのあたりの道は、車は走ってもいてもまだ静かで、いかにも京都の匂いが残っている。いつでもこの道へ入って、私はほっとするのだ。

京都から奈良へ車で来ると、奈良に近づくにつれ、私は怒りで胸苦しくなってくる。これだけ美しい寺や仏を千年も抱きかかえていながら、奈良はどうしてこんな殺風景で風情のない道をつくり、こうまで俗悪な建物を平気で続々つくるのだろうか。

私はいつでも奈良へ入るたびに不快になり、こういう道や町づくりをする奈良の人々の無神経さに腹をたてながら、目的の寺を訪れ、境内の静寂に包まれると、はじめてほっと息をするのだった。

それでも、不退寺を横に見て秋篠へ通じる道や、そこから左に折れて、唐招提寺に向かう西の京の道に入ると、やはり、奈良に来てよかったとほっとする。美しい薬師寺の塔を畠の向こうに見ながら通り過ぎ、なおしばらく走り続ける。

生駒山が近づくにつれ、ようやく行く手の右の方に斑鳩の里の森かげが見えはじめてくる。松林の上に五重の塔の法輪がのぞめるが、その前景となった斑鳩の屋並みは、奈良の町のように雑多で猥雑で、およそ斑鳩のさとなどというロマンティックで優雅なひびきには無縁のような表情である。戦前、私が学生の頃、訪れていた頃の斑鳩は広々とした平群の大野の一角に、ゆるやかに夢のように浮かび上がった物寂びた美しい里であった。農家の白壁や、その壁に映える柿の色の何と美しかったことだろう。崩れかけた築地の色の黄褐色の何となつかしかったことだろう。今の斑鳩はまるで戦後の焼あとに生まれた新興の場末の町のようにみぐるしい。

それだけに、いきなり道からそれて、法隆寺の広い参道に入ると、突然別世界にひきこまれたようなおどろきを覚える。もう法隆寺の土塀のまぎわまで、人間の愚かな破壊と侵略が押し寄せているのだ。

広いすがすがしい白砂の道は東西の大門をつないで、法隆寺を守る水のない濠のような清らかさに陽の光や物の音を吸いとっている。人の靴音も吸いとるのか。ここまでくると天地は古典の世界の静寂に包まれてきて、人々の姿がまるで小さく鹿や鳩のように気にならなくなってくる。砂道を横切ると正面に仁王が立っていて、入口は回廊の左の端につくられている。

回廊にとりかこまれた明るい内庭には五重の塔と金堂がそそりたっていて、千数百年の昔に魂をかけめぐらせてくれる。

数えきれない長いはるかな歳月の風雪を肌にしみこませて、まろやかな柱は、ところどころに補修の木肌を痛々しくはめこまれては

いるが、ひ割れたすきまにも虫喰いのあとにも、歴史の重さとあたたかさがしみこんでいて、思わず 掌 に触れたくなる。私がそうしたと同じ時、私の同行者も手をのばして、柱を撫で軽く指の腹で木肌をたたきこすっていた。

掌 にほのかに木肌にしみた陽のあたたかさが伝わってくる。

いつのまにか空は晴れわたり、ちぎれ雲がすでに春の色に輝きながら、金堂の屋根のそりの端、五重の塔の法輪の上に、ゆったり遊んでいる。

静かだった。人々もここまでくると言葉をつつしむのか、ささやきも聞こえず、ひっそりと回廊をめぐっている。

宝物殿で久々に百済観音に逢う。今はガラスケースにおさまっているこの稀有な美しい仏に、十七歳の春、私ははじめてめぐりあった。

その時は薄暗いほこりっぽい部屋の中で、ケースなどには入らず、み仏は無防御な姿勢のまま、空気にさらされて立っていられた。十七歳の私は、参観の人々の間にもまれて、このみ仏を斜めから仰ぎみつめているうちに涙があふれてきてどうしようもなかった。こんな美しいもの、こんななつかしいものを近々と仰いだのは生まれてはじめての経験だった。古式の微笑のあえかさ、尊さ、あたたかさ、神秘さ、私は 魂 をじかに仏の 掌 でなでられたように身ぶるいしていた。美しいもの、尊いものを見て涙がわくということを覚えたのもはじめての経験だった。そしてそれ以来、もう三十年も生き長らえながら、私はあの時ほど無垢な涙を一度も流したことがないのを思い出した。私はそっと同行者の方をうかがった。その人も無言で仏を仰いでいた。縹渺とした古式の微笑に誘われて、今その人の天女のような 趣 をさずかり、明らかに千数百年昔の 幻 の斑鳩のさとに飛び去っていることを感じ、私もまた身動きもせず、息をつめてそこに立ちつくしていた。

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67

「見どころ」、「聞きどころ」という言葉がある。「見どころ」は「見る価値のあるすぐれたところ」を、「聞きどころ」は「聞くねうちのある個所」を意味する言葉として、能、歌舞伎、人形浄瑠璃をはじめ、それから派生してきた舞踊や歌謡など、日本の伝統的芸能の世界でよく使われてきた。ところが、戦後になってから、いつのころからか、その世界では、この二つの言葉の影が薄れて、「見せどころ」、「聞かせどころ」という言葉が優勢になった、とある放送関係の人が教えてくれた。「見どころ」、「聞きどころ」というのは、芸能を享受する側がそれを演ずる側の芸について言う言葉であるが、「見せどころ」、「聞かせどころ」は反対に演ずる側が言う言葉であろう。後者のような言葉が昔から芸能の世界にあったのかどうか私は知らないが、「見せ場」という言葉はあったらしい。辞書によれば、「みせば」は「芝居などでその役者が得意とする芸の見せどころ」のことである。（「見せどころ」は――「聞かせどころ」も――辞典には見当たらない）が、それは役者自身が使ったのか、観客たちが「見どころ」を役者に投影して使ったのか、辞書からはわからない。「見せどころ」、「聞かせどころ」も、芸能の演者自身が使っているのか、興行や放送番組のプロデューサーなどが使っているのか、私はよく知らないが、とにかく、この二つの言葉がいま電波や活字に乗って横行しているというのは、どういうことであろうか。

「見どころ」、「聞きどころ」というのは、芸能を享受する人たちが出し物や曲目からつよい感動をうける個所を指すが、その感動は、それを演ずる人の芸をはなれては生じないが、享受する側の鑑賞力をはなれてもありえない。芸能は享受し鑑賞する側と演ずる側とが対等であって、両者の交感が成立するときにはじめて十全なものになる。そして、「見どころ」、「聞きどころ」は、享受する側の批評意識においてこそ成立するはずである。「見どころ」が隙のない芸の全体をつうじてしか成立しないことを知っている本もの芸能人は、けっして、「見せどころ」、「聞かせどころ」などとは言わないにちがいない。「見せどころ」、「聞かせどころ」という言葉は、享受する側を無視して、演ずる側が自己を誇示しようとする態度を示すものであろう。その言葉には、演ずる側がその芸をセールス・ポイントにして享受する側におしつけようとするあつかましさ、「ここが見聞きする価値のあるところだ」というおしつけがましさが感じられる。少なくとも、そこには、芸能人または興行者（放送のプロデューサーや解説者を加えてもいい）が、観客や聴衆にいわば指導者として臨むという思い上がった姿勢が見られる。

だが、他方から見れば、多くの人びとが伝統芸能に対する教養と関心を失っていることもたしかである。かつて、歌舞伎の観客なり浄瑠璃の聴衆なりは、演じられる出し物や曲目についてよく知っており、演ずる者と共通の理解のうえに立っていたが、今日、その共通の地盤は大きく崩れている。伝統芸能は生活の根から切りはなされて、いわば保存の対象にされている。だから何とかして多くの人たちに伝統芸能のよさを認識させようと熱意と焦りが、芸能関係者たちに啓蒙的指導者としての姿勢をとらせて、「見せどころ」、「聞かせどころ」などという言葉遣いを生みだしたのかもしれない。

いずれにせよ、「見せどころ」、「聞かせどころ」という言葉は、伝統芸能の危機の深さを端的に表現している。そして、そのような伝統芸能の危機が、日本の社会と日本人の生活意識とのすさまじいほどの急激な変化の一つの局面であることは、言うまでもあるまい。私は「見せどころ」、「聞かせどころ」という言葉のことを考えながら、言葉遣いの変化という些細な現象がどんなに複雑な要因をその背後にもっているかに思いあたって、あらためて驚いた。こうした言葉の変化が日本語の混乱として現れているとすれば、それは日本の社会の変化というより、日本の社会と文化そのものの危機を表しているのではあるまいか。

読解問題 10月4週分

問1　読解マラソン集1番「私はいろいろな植物の中で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　葱は、青と白がはっきり分かれているほど美しい
B　ボクは、おいてけ堀の声の主はどんなバケモノだろうと想像した
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集1番「私はいろいろな植物の中で」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　素材を傷つけずに生かす折り紙は、日本人のものの考え方を表している
B　今の金閣寺と昔の金閣寺と、どちらがいい印象で見られるかはわからない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集2番「モウシが公然と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　芭蕉の「こそこそと草鞋を作る月夜ざし」という句には、かくれて作る様子が表されている。

B　サ行の音は、人を「そしる」ときに使われることが多い
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集2番「モウシが公然と」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　何かを言うときに、強調して、「こそ」と言うのは、男性よりも女性に多い
B　山形県の方言で「梨売る」というのは、力を入れて物を言うという意味である
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集3番「母語ということばに」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　母語にとって、どの国家に属しているかということは関係がない
B　アイヌ人やオロッコ人はいるが、日本は単一民族国家である
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集3番「母語ということばに」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　世界のどの言葉も、その国の国民にとっては、国語である
B　ゲンダーヌさんの生まれながらのことばは、公式には使用が保障されていない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集4番「都会にはむろんのこと」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　人間は、「古池に飛び込む蛙の音」のような小さな音に静けさを感じる
B　静かさというのは、どこからも騒音の聞こえてこない状態を言う
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集4番「都会にはむろんのこと」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　日本の町々では、いま「静寂の空間」作りが進められている
B　静寂な空間というのは、無駄な空間だと思われている
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 11月4週分

問1　読解マラソン集5番「また、虫のことだが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　蚤の「意識以前の行動」というのは、何かがあったら跳ねるという行動である
B　蚤が「頭かくして尻かくさず」であるというのは、賢いようでいて肝心のところは賢くないということである

1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問2　読解マラソン集5番「また、虫のことだが」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　「そうかなア。残念だね」と言いながら、私はその蚤の曲芸を見てみたいと思っていた
B　「丁度それと反対の話が」の「それ」とは、「できるのにできないと思ってしまうこと」である
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問3　読解マラソン集6番「大学生の『私』は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　私は、卓也と一緒のベッドの横に寝ることにした
B　季節は、蛍の飛ぶような静かな秋だった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問4　読解マラソン集6番「大学生の『私』は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　私は卓也が早く寝てしまえるように、返事をしなかった
B　私が寝てしまったので、卓也もいつの間にか寝てしまった
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問5　読解マラソン集7番「一般に若い人々は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　若い人々は、自分がやろうとしてできなかったものを人生の不合理のせいにしてはならない
B　青年の犯す過失は、青年であることによって許されねばならない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問6　読解マラソン集7番「一般に若い人々は」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　「子を持ってはじめて知る親の恩」という言葉は、「情けは人のためならず」と同じような意味である
B　はなばなしい生き方は、誠実な生き方を両立しないことが多い
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問7　読解マラソン集8番「カラーテレビは教育上」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　白黒テレビを見ていると、色彩感覚が豊かになる
B　絵画の目標は、自然を再現することではない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

問8　読解マラソン集8番「カラーテレビは教育上」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A　ビルや道路の単純な色彩や形状は、自然の豊かな色彩や形状に比べると美しいとはいえない
B　人間は、豊かな自然の生活の場が与えられなければ生きていくことができない
1　A○　B○　　2　A○　B×　　3　A×　B○　　4　A×　B×

読解問題 12月4週分

問１　読解マラソン集９番「明治時代、英語の語学のことを」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　役に立つ語学を求める声は、まず、実業界からあがってきた。
Ｂ　社会的水準があがるにつれ、実学的な語学は求められなくなる。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問２　読解マラソン集９番「明治時代、英語の語学のことを」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　日本の語学教育が役に立たないのは、明治期の実学的な面が根強く残っているからだ。
Ｂ　実用性が求められている今こそ、語学は文化の学問として新生するチャンスだと筆者は捉えている。

１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問３　読解マラソン集１０番「私の郷里には」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　滝壷の近くで水の飛沫を浴びていても怖さは感じなかった
Ｂ　山火事の火が燃え移ることを「火が逃げる」と言った
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問４　読解マラソン集１０番「私の郷里には」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　山火事があると、子供たちはいつもみんなで山火事を見に出かけた
Ｂ　「トロッコ」は、夕闇の中を一人で帰る少年の話である
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問５　読解マラソン集１１番「もう暦の上では」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　筆者の怒りは、奈良の道や街づくりに対して向けられている。
Ｂ　戦前の斑鳩は、斑鳩のさとという優雅な響きにふさわしい美しい里であった。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問６　読解マラソン集１１番「もう暦の上では」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　筆者も同行者も、百済観音に手を伸ばし、軽く触れた。
Ｂ　法隆寺の中は、修学旅行の学生たちがにぎやかにひしめいていた。
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問７　読解マラソン集１２番「見どころ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　「見せどころ」「聞かせどころ」は、演ずる側が言う言葉だ
Ｂ　「見せどころ」「聞かせどころ」という言葉は、次第にすたれつつある
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

問８　読解マラソン集１２番「見どころ」を読んで次の問題に答えましょう。
　○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
Ａ　「見せどころ」「聞かせどころ」という言葉には、演ずる側の謙虚な姿勢が感じられる
Ｂ　言葉遣いの変化の背後には、複雑な要因がある
１　Ａ○　Ｂ○　　２　Ａ○　Ｂ×　　３　Ａ×　Ｂ○　　４　Ａ×　Ｂ×

１０～１２月

小１ コード：nane パス： PDF	小２ コード：nane パス： PDF	小３ コード：nane パス： PDF
小４ コード：nane パス： PDF	小５ コード：nane パス： PDF	小６ コード：nane パス： PDF
中１ コード：nane パス： PDF	中２ コード：nane パス： PDF	中３ コード：nane パス： PDF
高１ コード：nane パス： PDF	高２ コード：nane パス： PDF	高３ コード：nane パス： PDF